

百済観音像の成立背景について——竹形頭光支柱をめぐって

孫 語崎（慶應義塾大学）

飛鳥彫刻の代表作として著名な法隆寺百済観音像は、その造形表現及び造立経緯についていまだ謎が多く検討すべき点が残されている。なかでも、本像の背後に立てられた頭光の支柱に刻まれた竹を模したような表現については、従来『観無量寿経』に説く観音の廣大相を表すとする説があるものの、当時の観音信仰については『法華経』の影響を無視し得ないため、別の見方が可能であるように思われる。本発表では、如何なる理由で竹の図像を採用するのかという問題に着目し、『法華経』所説「随願応化」の観念を参照しつつ「竹」意匠の成立や意義を考察していく。さらにこの解釈を敷衍して、本像の成立背景を考察し、本像の意義を主に聖徳太子信仰との関連の中に求めてみたい。

百済観音像の他に、「竹」のモチーフは法隆寺所蔵の玉虫厨子須弥座の本生図にも描かれ、中国北朝の壁画及び彫刻に竹林を表す意匠として見受けられる。それらの図像は本生伝の発生地、あるいは「竹林精舎」のような釈迦等の諸仏及び弟子衆の滞在地や説法地を表すものであり、竹はそれらの地に生育するものとして知られる。この点を重視すれば、竹林は本生伝から派生した捨身や成道を象徴し、あるいは如来の常在と説法をも暗示することが考えられよう。

一方、中国南北朝期における仏教・儒学・道教の三教融合により、仏教に説かれた捨身行は、儒教における「舎生取義」と同義化されたとされる。この説は、『勝鬘經義疏』にも認められることから、飛鳥時代における仏教捨身観が、儒道的な性格を反映したものであったと推測される。こうしたことから、百済観音像の竹形支柱は、本生図に表される捨身成道を含意するのではないかとみられ、さらに仏教的内容に加えて、聖賢や仙人を象徴する意義をも与えられていたと考えてよいだろう。すなわち、竹形支柱の使用により、百済観音像は本来の観音的な一面に加えて、聖賢や神仙としての性格を持つことになる。

ここで百済観音像と聖徳太子との繋がりを考えるならば、百済観音像に見られる竹形支柱は、仏教・儒教・道教の三教が崇める聖王である聖徳太子のイメージを表す目的があったと結論づけられるだろう。加えるに、百済観音像が法隆寺金堂に安置されたという見解も提出されているが、これを受けるならば、百済観音像と釈迦三尊像との組み合わせは衆生に救済を施す聖徳太子（菩薩）と、成道した上宮法皇（如来）という二つの側面の太子相を表すと考えられる。